我が国の生活科および総合的な学習のコーディネーターに関する実態調査
―仙台市における「生活・総合コーディネーター」へのインタビュー調査をもとに―

A Survey of the Coordinator for Living Environment Studies and Integrated Studies in Japan: Based on an Interview Survey to the “Seikatsu and Sougou Coordinator” in Sendai City

加藤　智（Satoshi　KATO）

はじめに

現在、学校教育に生活科、総合的な学習の時間（以下、総合的学習）が導入され、大きな成果が見られている一方で、未だにその充実に課題を残している地域や学校もある。こうした課題の解決に向けて、生活科や総合的学習を担当する「コーディネーター」の設置や養成に関する様々な取り組みが行われている。

文部科学省は、2006（平成18）年度から「総合的な学習の時間活性化プラン」を実施し、総合的学習の企画・調整を担うコーディネーターを養成するための「総合的な学習の時間コーディネーター養成講座」を全国各地で実施したが、十分な成果を見る事なく終了している。栃木県では、本年4 月より県内すべての県立学校、市町立小中学校に「地域連携教員」を配置している[1)]。仙台市では、市立学校に勤務し社会教育主事の資格を有する教員を社会教育主事として委嘱する「嘱託社会教育主事制度」を導入している。このような新しい形のコーディネーター設置に関する取り組みが各地で現れているものの、コーディネーターに求められるスキルや専門性に関する研究が十分進んでおらず、未だに「単なるボランティア」から抜け出せていない現状も報告されている[2)]。

筆者はこれまでの研究において、米国の「サービス・ラーニング」（Service-Learning）の支援の重要なキーとして「サービス・ラーニング・コーディネーター」の存在に注目し、その成果を明らかにしてきた[3)]。サービス・ラーニングとは、1980年代から取り組まれ始めた「有意義な社会貢献活動を統合した教育および学習のプログラムであり、指導やリフレクションを伴うことにより学習経験を豊かにし、市民的責任感を育み、コミュニティを強固にすることを目的とする」[4)] 米国の教育活動であり、我が国の生活科および総合的学習との親和性が高い[5)]。そして、サービス・ラーニング・コーディネーターは、教員の技術的な支援や地域との協同的な活動を総合的にコーディネートする役割を担っており、サービス・ラーニング・コーディネーターの有無が各学校のサービス・ラーニングの実施率に大きく影響していることも報告されている[6)]。そのため、我が国においても、生活科および総合的学習の充実・発展のために、コーディネーターが果たし得る役割を検討することには価値があると思われる。

そこで本稿は、仙台市立広瀬小学校が独自に設置している「生活・総合コーディネーター」

に関する実態調査から、生活科および総合的学習の一層の充実と発展を担うコーディネーターの可能性を考究する。

１　研究対象および研究方法

仙台市立広瀬小学校は、学制発布に基づき1873（明治6）年に設立された、日本で最初の小学校の一つである。1934（昭和9）年には、生活綴方を実践する東北地方の教師たちが集う研究会が開かれるなど、生活に根ざした教育を重視する伝統がある[7)]。2015（平成27）年６月に開催される日本生活科・総合的学習教育学会第25回全国大会（宮城大会）の会場校にも指定されており、生活科および総合的学習の充実に力を注いでいる。

同校では、2014（平成26）年度より専任教員の「生活・総合コーディネーター」を設置している。なお、生活・総合コーディネーターの鈴木美佐緒教諭の調査時の役職は「副教務」であり、学級担任との兼務はない。同校の生活科および総合的学習に関する研究はコーディネーター設置の8年前から取り組まれており、現在も継続している。その間、研究指定校事業の委嘱を受けることもあったが、指定期間外も自主的に研究を続けている。

筆者は2015（平成27）年9月14日および15日の2日間、同校を訪問し、①生活・総合コーディネーターへのインタビュー調査、②生活・総合コーディネーターのサポートを受けている教員６名へのインタビュー調査、③同校の取り組みについての学校長へのインタビュー調査を実施した。本稿では、上述の①について論じる。

２　インタビュー調査の結果

本章では、生活・総合コーディネーターの取り組みや成果および課題を明らかにするために、インタビュー調査の内容とその他の調査（校内資料の閲覧や前章の②や③で得られた情報）と合わせて得られた若干の考察を以下に示す。なお、文中の（筆）は筆者、（コ）は生活・総合コーディネーターを指す。

（１）生活・総合コーディネーター誕生の経緯

（筆）先生の経歴をお聞かせください。

（コ）生活・総合コーディネーターとして２年目ですが、その前に「低学年コーディネーター」というものがあったので、それを入れると３年目になります。

（筆）広瀬小学校に着任したときからコーディネーターを担当されたのですか。

（コ）いいえ。着任時は３年生の担任でした。その後、１年生を２回続けて担任し、その後低学年コーディネーターとなりました。

（筆）昨年度から生活科も総合的学習もご担当されたのですか。

（コ）昨年度は、生活科については相談に応じる程度でしたが、今年度から本格的に生活科も総合的学習も担当するようになりました。昨年度も、授業の支援をしたり、掲示物の制作をしたりといったことはやってきましたが、カリキュラムのことや毎回の授業の細かなことまでは相談してはいなかったです。

（筆）低学年コーディネーターについて教えてください。

（コ）１・２年のまとめ役です。生活科に限らず、生徒指導も担当していました。また、２年生の生活科はすべて私が担当していました。初めて生活科を担当するという先生もいましたし、生活科の指導経験があまりないという先生もいましたので。TTを算数で行うということも考えられたのですが、先生方からは「生活科を担当してほしい」との要望の方が多かったです。それで、生活科のT1を担当し、掲示物なども作っていました。校外学習の計画なども立てていました。
（筆）２年生全クラスですか。
（コ）そうです。3クラス全てです。
（筆）この低学年コーディネーターという役割は、どのような経緯で誕生したのですか。
（コ）当時の校長先生の前任校では、そのような役割があったそうです。そして、校長先生が広瀬小学校に移られた際に、校長先生から提案がありました。それは、低学年、中学年、高学年それぞれにコーディネーターを置くという提案でした。中学年、高学年コーディネーターは、主に算数・少人数指導担当という形でした。
（筆）このような役割は、今でも残っていますか。
（コ）残っていないです。
（筆）これらをなくして、今は生活・総合コーディネーターに一本化されたと。
（コ）そういうことです。生活科、総合的学習を支えるという役割も想定して、低、中、高学年にそれぞれコーディネーターを置いたのですが、総合に詳しい方が担当するとは限らないもので、そういうところでは、結局、一般的な少人数指導と変わらない状況になり、担任の先生方から総合的学習についての相談先がないという声が聞かれるようになりました。それで、私は低学年コーディネーターでしたが、中学年の総合的学習にもT2という形でかかわっていました。
（筆）低、中、高学年のコーディネーターについては、今いる教員の中でその担当者を決めるわけですね。
（コ）校長先生が決めます。
（筆）そのために特別な加配教員がいるわけではないのですか。
（コ）そうです。あくまでも校務分掌の一つとして決めています。

以上のインタビューの内容から、広瀬小学校の生活・総合コーディネーターが、行政的な支援によって設置されたのではなく、学級担任らのコーディネーターへの必要感の高まりから、学校独自の校務分掌として位置づけられたことがわかる。一般的には算数科等の教科の少人数指導に教員が充てられているが、同校ではこうした少人数指導の実施よりもコーディネーター設置のニーズが高かったということである。

その結果として、同校では、より児童の興味・関心に沿った学習課題に取り組むことができるように、全学年、全学級がそれぞれ独自のカリキュラムで生活科および総合的学習の授業が展開されている。

（２）生活・総合コーディネーターの役割と取り組みの実際

（筆）コーディネーターについて、どのように受け止められましたか。
（コ）低学年コーディネーターに指名されたときは、内心、自分で授業がしたいと思っていました。担任をもって、子どもの変容を見ながら、自分が授業をするのが楽しいですから。達成感を味わえますよね。そこから離れて寂しい気持ちになりました。頑張ってやりましたけど、難しさも感じました。

（筆）どのようなところが難しいと感じられましたか。
（コ）先生方を助けるためにいろいろな仕事をしますが、授業をするのは担任の先生ですから、あまり口を出すこともできず、ということもありました。また、先生方もそれぞれ個性がありますので、どのような言葉がけをするのか、また、毎回、授業の記録を付けて、そこに指導の言葉を書くのですが、どういう言葉を書けばその先生が気付いてくれるか、先生によって考えなければならないので、当初は最後のコメントを書くのにものすごく時間がかかりました。授業の記録を付けるのは、機械的な作業なのでそれほど大変ではないのですが、コメントにはとても神経を使いました。教えるべきことは教えなければなりませんし。
（筆）まさに、子どもに評価を返すのと同じですね。
（コ）そうです。学級経営、学校経営ですね。とても良い勉強をさせていただきました。
（筆）それぞれの先生方の思いやプライドなんかもありますよね。
（コ）上から言ってもダメでしょうし、この先生にはここまで支援をして、褒めてやる気をもたせて、ということもあります。この先生は少し見守って、ということもありますね。あるときは、良い板書や掲示物があったときに、すぐに回覧して、その先生の努力が認められるようにする、といったこともやってきました。
（筆）子どもたちへの指導と同じですね。
（コ）この先生は情報関係が得意だから、それを生かした導入をやってもらったり、この先生は掲示物が得意で、学びの履歴を上手に残しているので、他の先生方に「こんな学びの履歴の残し方がありますよ。」と紹介したりして、ベテランの先生も「若い先生でもここまでやっているのか」と刺激を受けてほしいという思いもありました。もちろん、若い先生方の参考になるようにベテランの先生のものを回すこともありました。このような情報発信をすることも、私のモチベーションを高めることにつながっていました。
（筆）先生方のやる気や指導力を高めることもコーディネーターの仕事なのですね。
（コ）外部への発信ということも積極的にやっています。ホタルの実践などは、大学の先生にも指導に入っていただいており、今後本として出版されます。また、総合的学習で地元の銘菓を取り上げている実践も取材を受けており、先日仙台市内に配布されました。このように、良い実践を取り上げて外部に宣伝・発信する、ということにも力を入れています。そうすることで、その先生がいろいろな方に認められて評価され、やる気も出てくるんじゃないかと思っています。
（筆）外部への発信が、先生方のやる気やモチベーションを高めることになっているんですね。
（コ）そうですね。自分だけが頑張ってやる、というのも違うかな、と思うんですね。ですので、先生方のよさを認めながら、先生方が大変そうなときには、自分も手伝ったり一緒にやったりする、という姿勢でいますし、あるいは、何か尋ねられたらすぐに答えられるように一生懸命勉強しておかなければいけないとも思いますね。それなりに時間とお金をかけて勉強をして、先生方に情報発信をしています。先生方のよさを認めつつも、授業にT1で入ることもありますが、自分の取り組んでいる姿も見せながら、臨機応変に対応してきました。
（筆）成果は感じられましたか。
（コ）先生方は変わってきたように思います。一人一人自立してきて、自分でカリキュラムを作っているということは、大きな成長だと感じています。先生も変わってきていて、子どもたちも変わってきていることは実感します。このような様子を見ると少しは力になれたかと思います。
（筆）先生たちも成長しているんですね。
（コ）広瀬小学校も、これまで（注：着任当時）は正直マイナスの状態だったと思います。ここまでの積み重ねで、ようやくスタートラインに立ったという感じです。新しく来た先生は頑張ら

ないと、子どもたちの方が進んでいて、追いつけないんです。子どもたちからどんどん、こうしたい、ああしたい、という意見が出ます。担任の先生が去年の総合的学習がどうだったのかを聞くと、どんどん出るんです。そして、これでどんな力が付いたのかを聞くと、それもどんどん言ってくるんです。

（筆）子どもたちが、自分でどんな力を付けたのかを自覚しているということですか。

（コ）いろいろな人にインタビューして、情報を収集する力が付いた、といようように、どんどん出るわけです。これには本当に驚きました。今年度は、全クラスの第１時の授業を見せていただいたのですが、やはりどのクラスでも同じように出ているんです。

（コ）先生方の意識も変わってきて、第一時をどのようにやればよいのか、という相談が結構ありましたので、私なりに、３年、４年、５年はこういうように、というテキストのようなものを作って、この流れでやってみて、というように伝えたんです。クラスの中に、身につけたい力という掲示物がありますが、これは第一時にやったことを基にして作っています。それを教室に掲示して、総合的学習はこういう力を付けるためにやるんだ、ということを自覚できるようにしています。この掲示物も、私が全クラス分作り、掲示してもらっています。

（筆）特にこちらに赴任されて１年目の先生にとってはありがたいですよね。

（コ）第１時の指導案を作って、掲示物を作って、最初の流れを確認して、ということをすると、先生方も自信をもって授業ができるんです。これは、自分なりに成功したと感じています。第１時の授業って、先生方は他の先生の授業を見る機会がほとんどないんですね。でも、私は全クラス見ているので、反応もわかるんですね。なので、４月の初日や二日目に先生方に説明して、一緒に考えるということをしました。今年の総合的学習は何やりたい、と尋ねても、子どもたちはふざけたことは言わないですね。いろいろな意見が出ますが、なんでそれをしたいのかを尋ねると、去年はこういうことをやってこういう力が付いたけど、今年はこういうことをチャレンジしたいというように、理由もしっかり言うんです。

（筆）それは、この流れをきちんとどの先生もが行ってきたから、ということですね。

（コ）そうです。というのも以前、異動して来られた先生で、広瀬小学校の研究について説明したのですが、子どもの思いや願いを生かすとか、興味関心を生かした題材にするとか、そういったことを強く言いすぎたために、全部子どもに投げっぱなしにしてしまった、ということがあったんです。話し合いをすると、子どもたちはどんどん空想で話をしていくのですが、方向性が定まらず、先生も止めないものだから、あっちに行ったりこっちに行ったりするんですね。そして、一度リセットした、というクラスありました。そこで、やはり第一時をクラスみんなでしっかり確認してスタートするようにしないといけない、ということを強く感じたんです。学習材を決めるときに、いくら子どもの思いや願いを大切にすると言っても、それだけではいけない、ということを勉強しました。その課題を生かしたので、どのクラスも大変スムーズにスタートしました。

（筆）方向性が定まっていないと、学習としても不十分なものになってしまいますよね。

（コ）こちらから見ていれば、もう先が見えていて、潰れていくわけです。これでは絶対に探究にはならないな、ということもわかります。それなので、地域をみんなで歩いたり、前年度はこんなことをしました、という報告会をしたり、ということはするようにしました。４月は放課後の時間にゆとりをもたせるようにしましたので、地域の素材を探す活動をしたり、カリキュラムを一緒に考えたりする時間をたっぷり取りました。

（筆）そうしないと、良い総合的学習の授業は生まれないというわけですね。

（コ）そう思います。その他に、先生方に個別で面談をして、悩みを聞くようなこともしています。もう大丈夫だと思って、私があまり入っていない先生が実は悩んでいて、ということもあり

ましたので、やはりこのような機会も必要なのだと思いました。
（筆）経験の浅い先生や異動してきたばかりの先生を気に掛けるので、ある程度経験を積んだ先生はいいかな、という感じでしょうか。
（コ）そうです。それで「なんでも相談コーナー」を開いたのですが、これも最初は希望制だったんです。必ず相談してください、というものではなくて、空いている時間を書いて回覧を回して、予約できるようにしたんです。そうしたら、ほとんどみんな名前を書いたんです。３人くらいだと思ったんです。嬉しいことなんですけど、それなりにみんな話したいことがあったんだな、と思いました。
（筆）そこでの相談は、生活科や総合的学習に関することが中心ですか。
（コ）もちろんそうです。たくさん出てきました。
（筆）先生に相談できるようにするためには、信頼関係が重要になるわけですね。
（コ）私はそう考えてやってきました。優しいだけではダメだと思うんです。指導もしなければいけないので。時には厳しいことも言いますし、その分真剣に支援もします。自分がこれまでに積み重ねてきたことは伝授するようにしています。
（筆）このような信頼関係を築くためには、どんなことが必要だとお考えですか。
（コ）私自身が心がけたことは、先生方と意思疎通をとりながら、きちんと人間関係を築くことです。この仕事に関係のないことも含めて、いろいろは話を聞いて、相談にのったりしました。先生方は同じ学年の担任間では関係性もよくなると思いますが、コーディネーターはそう簡単にはいかないんですよね。担任の先生方全員にできるだけ寄り添おうとは考えていました。
（筆）まずは関係性をつくるところからですね。
（コ）本校も、昨年大きな教員の異動がありました。本校に赴任された先生方の中には、コーディネーターについて理解されていない方もいます。それなので、私がどのような仕事をしているのかを、パネルを見せたり、別の研修で使用したパワーポイントを提示したりして紹介しました。
（筆）コーディネーターの仕事について理解してもらうための努力も必要なんですね。
（コ）先生方には、生活科や総合的学習の取り組みについて、成果と課題を出してもらっています。ですので、私もコーディネーターとしての成果と課題を発表しています。日頃は、自分の仕事があっても、声がかかれば、そちらの仕事を優先するようにしています。

以上のインタビューからは、コーディネーターとしての役割やその難しさがわかる。

コーディネーターの職務を遂行するためには、他の教師に対する高い指導力が求められるが、それだけではこの職務を全うすることはできないようだ。指導の根底には、教師との信頼関係の構築が必要となる。また、こうした信頼関係を全学年全学級の学級担任との間に築く必要があるため、コーディネーターは努力や工夫をしている。相談や打ち合わせなどは、時間的にどうしても制限があるため、広瀬小学校に着任したばかりの教師や経験の浅い教師といった「困り感」の大きい教師に対して優先的に時間を割いている。また、生活科や総合的学習の授業を直接的あるいは間接的にサポートし、教師の負担感の軽減に尽力している。こうした取り組みが信頼関係の構築に寄与していると考えられる。

コーディネーターの役割としては、教師のサポートは当然であるが、教師の実践的な指導力やモチベーションを高めることに最も重点を置いている。そのために、コーディネーターが他の教師の取り組みを積極的に校内および外部に情報を発信したり、自ら授業を担

当して指導方法を直接教えたりといったことを行っている。また、授業に対する指導助言、掲示物の制作といった教師への指導や支援も大きな役割となっている。

（３）生活・総合コーディネーターと幼小連携

（筆）生活科と幼小連携、スタートカリキュラムは密接に関わってくると思いますが、先生はどのようにかかわっていらっしゃいますか。
（コ）仙台市のスタートカリキュラムを作成するときには、作成委員を務めました。市教委のバックアップもあって、研究会も開かれ、市内全小学校がスタートカリキュラムに取り組んでいます。幼稚園との交流も、ほとんどの学校で１年に１回は交流をしていると思います。ただ、スタートカリキュラムの中身は、最初に作ったものをずっとやっているような状況にありますので、見直しが必要ではないかと思います。中には、一般的な特別活動の内容が軸になっているようなものをスタートカリキュラムと思っているようなところもあります。
（筆）広瀬小学校では、１年生のスタートカリキュラムをどのように作成しているのですか。
（コ）幼小の引き継ぎ会で、幼稚園でどんなことをしてきたのか、どんな力を付けているのかをアンケートを取っています。保護者説明会では、保護者にもアンケートを取っています。それを分析して、第１週目はこういうことをしよう、というように目標を立ててカリキュラムを作ってきたのですが、毎年１年生の担任が変わりますので、やり方は多少違ってきます。アンケートはそのときの１年生の担任が行い、次年度の１年生の担任に引き継ぐことになっています。
（筆）このような取り組みは、広瀬小学校独自のものでしょうか。
（コ）アンケートを取る学校は増えてきたと思います。幼小交流も増えてきて、１回やった学校が今度は５回、６回とやるようになったところもあります。仙台市では、スタートカリキュラムが広がりつつあると感じています。

近年、幼小連携のニーズの高まりとともに、生活科ではスタートカリキュラムの策定が求められている。このインタビューにおける筆者の質問の意図は、生活科を担当するコーディネーターが幼小連携にどのようにかかわることが有効かを明らかにすることである。仙台市はスタートカリキュラムについては先進的に取り組んでいる地域であり、その取り組みも広く知られている[8)]。仙台市では、幼小連携の窓口は、一般的に第１学年の担任が担っている。広瀬小学校においても、幼小連携の担当者がコーディネーターとは別に位置づけられており、次年度への引き継ぎやアンケートの分析といった職務はこの担当者が中心になって行うことになっているが、担当者は基本的には毎年交替するため、その取り組みには大きな差が生じる。そのため、コーディネーターのサポートが不可欠となっているのが実態のようである。

さらに、幼小交流といった交流活動においては、コーディネーターが担当者と一緒に年間の活動内容を考えたり、幼稚園に交渉したりといった役割を担っている。また、幼小交流の打ち合わせにはコーディネーターが同行し、交流のねらいが正しく幼稚園側に伝わるようにしている。このような生活科に関わる内容については、コーディネーターが積極的に関与している。

（４）生活・総合コーディネーターと小中連携

（筆）新しい方向性という視点では、小中連携も求められてくると思います。総合的な学習の時間を小学校と中学校との間でどのように繋げていくのか、ということも課題ではないかと思いますが、どのように考えていますか。
（コ）そうですね。よく広瀬小学校の卒業生が私に「調べてまとめて終わった」、「中学校３年で、小学校６年でやったことと同じようなことをやっている」といったことを言いに来ます。たくさんの子が言っています。中学校は先生方の専門教科が決まっていること、いろいろな小学校の子どもが集まること、いろいろな難しさがあると思います。本校で開く校内研修や研究大会の案内は、中学校にも送るようにはしています。
（筆）中学校の先生方で、案内を見て、関心をもたれている様子は感じますか。
（コ）あまり感じません。普通の授業公開では来られる先生もいらっしゃいますが、忙しいのでしょうか。特に校区の中学校は仙台で最も大きい規模の学校ですので、生徒指導でそれどころではない、というのも実情でしょうか。それでも、引き継ぎの際には、総合的な学習の時間の実践内容や育てた力については伝えるようにしています。
（筆）仙台市では、小中学校間の人事交流はほとんどないと聞いています。引き継ぎの話だけで中学校の先生にどれだけ伝わるのか、という点が難しいのではないでしょうか。
（コ）こちらからは前向きに働きかけてはいるのですが、なかなか難しいでしょうね。中学校よりも高校の方が総合的な学習の時間の充実に向けて動いているようです。先日、学会の全国大会で授業をされる高校から、校長先生と副校長先生が授業を見に来られました。子どもたちの話をしっかり聞いて、たくさん写真を撮られ、意欲的で驚きました。
（筆）高校の方が総合的な学習の時間の取り組みに前向きになっているのですね。中学校にも、総合的な学習の時間の担当の先生はいらっしゃるんですか。
（コ）いらっしゃるようです。しかし、専門の教科の先生が担当されるというわけではないので、そこも課題だと感じています。中学校２年では職場体験学習があるようですが、それだけで終わっているという話も聞きます。もったいないと思っています。
（コ）本校の卒業生が、様々なテストの結果が良いそうです。なぜ広瀬小学校出身の生徒はこんなに良いのかと尋ねられたことがあります。特に自己肯定感については、生活状況調査の結果から見ると、ここ数年ずっと高いようです。意欲的に何事にも取り組んでいたり、不登校になりにくかったりといった、いろいろなところに結びついているのではないかと感じています。

総合的学習は小学校から高等学校にまで設置されていることから、校種間の連携・接続を考慮する必要がある。しかし、筆者が行った調査研究では、小学校、中学校ともに多くの教師が総合的学習における小中連携・接続の必要性については実感しているものの、その取り組みはほとんど進んでいないことが明らかとなっている[9)]。

広瀬小学校区の中学校には、広瀬小学校を含む小学校４校の児童が進学する。広瀬小学校には、小中連携担当者がコーディネーターとは別に設置されているが、特に総合的学習について連携を図るといった具体的な取り組みは行われていない。中学校の実態調査を行っていないため、あくまで小学校側の視点からの言及であることをあらかじめ断っておくが、今回のインタビュー調査を通して、小学校の総合的学習の積み重ねが中学校進学で途絶えてしまっている状況がうかがわれる。また、小中学校間の総合的学習に対する意識

や取り組みに温度差もあるようだ。さらに、広瀬小学校と他の小学校の総合的学習の取り組みとの差異も、中学校にとっては小学校からの連続的・発展的な総合的学習のカリキュラムを考える際の課題となっているようだ。

（５）生活・総合コーディネーターの展望

（筆）先生のようなコーディネーターは、今は仙台市でも広瀬小学校にしかいらっしゃらないと思いますが、今後さらに広がっていったらよいと思いますか。

（コ）よいと思います。私が逆の立場だったら、とても助かります。先生方一人一人が自分で考えてカリキュラムを作ることができますし、とても力がつくんじゃないでしょうか。

（筆）それを実現させるためには、様々な課題がありそうですね。各学校にコーディネーターの先生が置かれる可能性はありそうですか。

（コ）そのためには研修など、さまざまな取り組みが必要となってきます。ただ学校に設置するように求めるだけでは機能しませんので、どのような体制にするのかも含めて検討が必要だと思います。

（筆）広瀬小学校では、学校の中から生活科や総合的学習のコーディネーターのニーズがわき上がって設置されたという経緯がありますが、ほかの学校の様子はどのように感じますか。

（コ）生活科や総合的学習の研究校は少ないですよね。このようなニーズはあまり出てきていないと思います。しかし、生活科や総合的学習に限定しない「カリキュラムコーディネーター」という形も考えられると思います。生活科や総合的学習に限定されてしまうと、生活科や総合的学習を大事だと思っている先生であればよいのですが、実際はそうばかりではないですよね。全体に広げていくことが難しいかと思います。

（筆）「なぜ、生活科と総合的学習なのか。」という声も出てきそうですよね。

（コ）総合的学習は教科書がない、カリキュラムづくりが大変だから、ということは言えると思いますが、これからは、教師一人一人がカリキュラムを自分で作らなくてはいけない、となってくると思います。学校によっては、３年は環境、４年は国際理解、というように内容が決まっている学校もあり、その学年になったら決められた内容をやる、ということが普通に行われているんですよね。でも、なんでその内容なんだろう、という疑問をもつ先生がいないのだろうかと不思議に思っています。毎年、決まっているからその内容をやるんだ、という考え方を変えなければいけないのではないかと。一人一人がカリキュラムをつくる時代になっているんですから。

（筆）教科書や指導書の通りに指導すればよい時代ではなくなってきますよね。

（コ）そこで、カリキュラムコーディネーターがカリキュラム全体をコーディネートするんです。総合的学習については、他教科との関連をどのようにするのかを調整して整理する役割を担っていけばよいのではないかと思います。

（筆）教科ごとにカリキュラムを考えるのではなく、カリキュラム全体で考える、ということですね。

（コ）どんな力を付けたいか、ということから始まり、そのためにはどんなことをどんなふうに取り組めばよいか、ということを考えるんですね。教科でも必要なことだと思います。各学校で、研究の核となる教科が違うと思いますが、その教科の中で、系統的なつながりや他教科との関連をどのように図りながらどのようにカリキュラムを充実させていくのか、という視点で研究していくことが大切なんだと思います。未だに、教科書に示された標準の時間数で指導しようというところもありますよね。別に教科書を教える必要はないのです。どんな力を身につけさせるのか、

というところから出発しないといけないと思います。そのことをきちんと理解してもらう、意識改革をしていく必要がありますね。若い先生と話をしますと、「教科書に載っているのに、やらなくていいんですか。」と言われるんですね。教科書に示されている時間数も実際にやっていくと変わってくるでしょうし、１年生と２年生で同じ内容を扱うこともあるでしょう。このような基本的なところから、カリキュラムの作り方を教えています。

（筆）そのようなカリキュラムの作成を、広瀬小学校では、生活科と総合的な学習の時間を核にして実践をされているのですね。

（コ）やはり、生活科と総合的学習だけに特化してはいけないと考えています。生活科と総合的学習を核にしながらも、カリキュラム全体を見ていかないと、何を教えるか、ということではなく、どのように学ぶか、という新しい学習指導要領が目指す方向性にはならないのではないでしょうか。これまでもやってきたことだとも言われますが、難しいところでもあると思います。

（筆）このような考え方を浸透させる役割も、カリキュラムコーディネーターに求められるということですね。

（コ）本当は私がいなくても、どの先生もがそれをできるようにならないといけないんですが、そのきっかけ作りとして、カリキュラムコーディネーターからアイデアをもらって、自分でカリキュラムをつくっていくというシステムができればよいと思います。研修会や見学会を充実させて、少しずつ積み重ねて充実させていくということができないといけないと思います。コーディネーターがいなくなったら、生活・総合ができなくなった、ではいけませんので。

（筆）そうすると、コーディネーターとなる人を育てていくことが必要ですね。

（コ）嬉しいことに、広瀬小学校から異動された若い先生が、「うちの学校の総合、おかしい。」と言って変えようしているんです。広瀬小学校で頑張ってきた先生方が、外で一生懸命発信していることが、一つの成果だと感じています。今できることをやって、少しずつ発信していってと伝えました。

（筆）そういう方が、将来的にコーディネーターになっていくのかもしれませんね。

（コ）でも、最終的には校内であれば校長先生にかかってくると思います。本校の校長先生は、生活科や総合的学習の良さを理解してくださっていて、背中を押してくれています。

（筆）校長先生の考え方や力量となってくると、コーディネーターを広げていこうということは、単なる制度設計の問題ではないということになりますので、いろいろと難しさが出てきますね。

（コ）研修は、コーディネーターだけでなく、校長先生も必要だと思います。なぜコーディネーターを置くのかという必要性やその効果、また、発揮してほしいリーダーシップについてもきちんと研修などの形で理解を促していく必要があると思います。

（筆）それがないと、形骸化する恐れもありますよね。

（コ）学校によっては、従来通り少人数指導に充てられる、なんてことも起きるのではないかと思います。

（筆）コーディネーターとしての資質能力が十分でない方がその担当になってしまう、ということも起きそうですね。

（コ）総合は教科書がありませんので、カリキュラムを一人一人がきちんと作る必要があるわけです。でも、これは総合に限ったことではなく、本来どの教科も担任はカリキュラムを作れなければならないんですよね。そのように意識が変わり、コーディネーターがそのサポートをすることができれば、学校は大きく変わると思います。仙台では、そのような動きが少しずつ出てきています。仙台から発信できればと思っています。

生活・総合コーディネーターの展望については、生活科や総合的学習に特化した形ではなく、カリキュラム全体を見据えた「カリキュラムコーディネーター」として充実・発展の可能性を考えていることがわかる。これは、特定の教科・領域に限定した考え方ではなく、あらゆる教科・領域において、教師自身がカリキュラムマネジメント能力を身につけることが必須となることが想定される、次期学習指導要領を見据えた考え方とも一致する。そして、カリキュラムコーディネーターには、このような考え方を周知徹底し、教師に対する指導的な役割を担うことが期待されている。

カリキュラムコーディネーターの考え方は、一見すると生活科や総合的学習の充実と発展とは直接的な関係がないようにも思える。しかし、カリキュラムマネジメント能力が最も求められる教科・領域は生活科や総合的学習であることは間違いがないだろう。そして、これらの教科・領域を中心にカリキュラム全体をマネジメントする能力が一人一人の教師に求められるのであり、カリキュラムコーディネーターが生活科や総合的学習の充実と発展に寄与する可能性は高い。

３　生活科および総合的学習を充実させるコーディネーターのあり方

以上のインタビュー調査の結果と考察を通して、おおよそ以下のことが指摘できる。

まず、生活・総合コーディネーターの誕生の経緯からは、特別な予算や加配教員の確保がなくても、校内のコンセンサスが得られれば現状の教員組織でコーディネーターを設置することが可能ということが明らかとなった。

一方で、生活・総合コーディネーターの取り組みと成果から、コーディネーターに求められる高い専門性と資質能力も見えてきた。生活・総合コーディネーターに求められる第一の資質能力として、他の教師との信頼関係の構築力が挙げられる。信頼関係の構築のために、コーディネーターの職務についての理解を促す様々な手立てが講じられている。また、相談や指導を受ける場が設定されているが、これも信頼関係が根底になければ機能するものではない。その上で要求されるのが、確かな指導力である。担任教員の悩みや苦労に対して、コーディネーターが具体的かつ現実的な指導や提案を行っている。この指導力は、コーディネーター自身の生活科および総合的学習の指導に関する豊富な経験、そして様々な研究的な活動によって培われている。そして、ここで求められる指導力は、教員の特性や経験に応じて、教員の「自立」を見据えたものでなければならない。コーディネーターはあくまで教師が自分の力でカリキュラムを作成して質の高い授業を行っていくことをサポートする役割であり、最終的にはコーディネーターがいなくてもこれらができるようにすることを目指している。

そして、コーディネーターがその専門性や資質能力を発揮するための校内体制や研修体制の整備も須要である。必要な施策を具体的に挙げるのであれば、一つは、相談や指導助言を受けるための時間の確保である。広瀬小学校の生活・総合コーディネーターは学級担任ではないため、全学年全学級の生活科および総合的学習の授業に参画している。その結

果として、担任教員の授業の記録を取ったり指導をしたりすることが可能となっている。コーディネーターの力量に依存する面も考慮しなければならないが、時間の確保は不可欠であろう。そしてもう一つが、コーディネーターの養成や普及のための研修の実施である。コーディネーター自身の研修は当然であるが、学校長のコーディネーターへの理解の促進も合わせて行っていく必要性も明らかとなった。

最後に、本調査を通して得られた知見から、今後コーディネーターに期待されるであろう取り組みについて以下に論じたい。

一つは、校種間連携の促進である。広瀬小学校の生活・総合コーディネーターは幼小連携には積極的に関わっているが、小中連携への関与は見られない。幼小連携に関しては、仙台市が先進的なスタートカリキュラムを策定しており、市内で広く実践されている。これは仙台市の取り組みの大きな成果と言える。その一方で、最初にスタートカリキュラムを作成してから５年以上が経過しており、カリキュラムの見直しが必要な時期にさしかかっていると思われる。仙台市において広がりつつあるアンケートの内容の精査や見直しも含めて、担任の教師だけで担うことが難しいこれらの実施に際しては、コーディネーターが一定の役割を担う必要がありそうだ。

小中連携については、小中学校の間で、総合的学習の連続性・発展性が十分に図られていないという課題が見られる。各小中学校にコーディネーターが設置され、コーディネーター同士の連携が図られることが効果的な解決策になると考えられるが、こうした状況を創り出していくためには多大な時間と費用を要することが予測される。広瀬小学校は生活科や総合的学習の成果を対外的に広く発信している。こうした外部への働きかけも、時間はかかるが、中学校を含む地域全体の総合的学習への意識を高めることにつながるものである。現状では、総合的学習に意欲的に取り組んできた広瀬小学校出身の生徒の姿が、中学校で肯定的に受け止められているようである。中学校の総合的学習への意識を変えるさらなる成果発信が期待される。加えて、近隣の小学校にも働きかけ、小学校間の連携を深めることで、小学校から中学校までの連続的・発展的なカリキュラムを作成する素地をつくることも効果的と思われる。こうした取り組みの一層の充実が求められるであろう。

そしてもう一つが、カリキュラムコーディネーターとしての学校改革、教師の意識改革である。生活科や総合的学習に特化しない、カリキュラム全体の構築をサポートするカリキュラムコーディネーターへの以降は、今後求められる方向性と考えて間違いなさそうである。そのためには、どの教科・領域においても、教師が自らの力でカリキュラムマネジメントをする必要があるということを、教師一人一人が認識することである。未だに、生活科では教科書や指導書に沿ったカリキュラムが、総合的学習では前年度の内容を踏襲した当たり障りのないカリキュラムが広く浸透している。こうした課題を解消するための教師の意識改革もコーディネーターには期待されるだろう。

おわりに

本稿では､広瀬小学校の生活･総合コーディネーターがもつ専門性や資質能力について、その一部分ではあるが明らかにすることができた。そして、生活科や総合的学習を一層充実させるためのコーディネーターのあり方を検討する中で、生活科や総合的学習に限定しないコーディネーターの可能性についても見えてきたところである。

本稿では、生活・総合コーディネーターへのインタビュー調査を中心に取り上げたが、学校長や生活・総合コーディネーターのサポートを受けている教員へのインタビュー調査も既に実施済みである｡これらの調査の分析をすることで､生活科および総合的学習のコーディネーターの専門性や解消すべき課題がさらに明確なものになると考えられる。これらの分析および検証については、今後稿を改めて論じることにしたい。

注

1）下野新聞（2014年3月16日号）および教育新聞（同年3月31日号）に詳しい。

2）星恭典(2013)「嘱託社会教育主事を生かす～制度見直しから見えてきたこと～」財団法人日本青年館『社会教育』6月号

3）加藤智(2014)「米国サービス・ラーニングの現状と課題　総合的な学習の時間の充実と発展のために」日本生活科・総合的学習教育学会第23回全国大会（埼玉大会）自由研究発表

4）村上徹也(2012)「サービスラーニングにおけるリフレクション研究の到達点」(Vol.20)、p.8

5）筆者は、サービス・ラーニングと生活科および総合的学習との関係性について、以下の論文で論じている。

・ 加藤（太町）智(2012)「幼少期における子どものコミュニティへの参加の可能性
－米国サービス・ラーニングの実践分析から－」愛知教育大学生活科教育講座『生活科・総合的学習研究』第 10 号、pp.11-20

・ 加藤智(2015)「総合的な学習の時間とサービス・ラーニングのカリキュラムおよび学習過程の関係性に関する研究」愛知教育大学生活科教育講座『生活科・総合的学習研究』第 13 号、pp.1-10

6）2008 年の全米の公立学校を対象とした調査において、サービス・ラーニング・コーディネーターの設置率は常勤が 8%、非常勤が 18%であった。同年の全米の公立学校のサービス・ラーニングの実施率は 24%であることから、コーディネーターが設置されている学校でのみサービス・ラーニングが実施されていると考えられる。

Kimberly S., & Robert G. Jr., & Nathan D. (2008). *Community Service and Service-Learning in America's Schools,* Corporation for National and Community Service

7）日本生活科・総合的学習教育学会会報(2015)No.47、p.4

8）例えば、次の刊行物がある。

・ 木村吉彦、仙台市教育委員会(2010)『「スタートカリキュラム」のすべて　仙台市発信・幼小連携の新しい視点』ぎょうせい

9）加藤智(2016)「総合的な学習の時間における小中連携・接続の実態と今後の課題」日

本生活科・総合的学習教育学会学会誌『せいかつか＆そうごう』第23号（収録予定）

〔付記〕

本稿は、JSPS科研費（15K21574若手研究(B)「生活科・総合的な学習の時間を担当するコーディネーター設置の可能性に関する研究」）の助成を受けた研究成果の一部である。

本稿の執筆に際してご協力いただいた仙台市立広瀬小学校の鈴木美佐緒先生に心より御礼申し上げます。